

地域振興を目標とした地質観光情報の開発と利用の試み 茨城大学学生によるジオツアー実践例

Attempt to utilize of geological information for sightseeing aiming at economic development- Example of Geo-tour-

滝本 春南 [1]; 細井 淳 [1]; 岡本 高幸 [1]; 伊藤 太久 [1]; 松原 典孝 [1]; 茨城大学地質情報活用プロジェクト 松原 典孝 [2]
Haruna Takimoto[1]; Jun Hosoi[1]; Takayuki Okamoto[1]; Taku Ito[1]; Noritaka Matsubara[1]; Matsubara Noritaka Ibaraki University geological information utilizing project team[2]

[1] 茨大・理・地球; [2] -

[1] Environmental Sciences,Ibaraki Univ.; [2] -

<http://geotourde.gozaru.jp/>

平成 20 年に国土交通省に観光庁が発足するなど、近年日本においては観光開発により地域社会の活性化を目指す動きが活発である。また、エコツーリズムやグリーンツーリズムは、地域の観光開発のほか生涯学習にも有効であると注目されている。そのような中で、ユネスコが提唱したジオパークは、世界遺産に準ずる新たな取り組みとして世界各地から期待を集め、現在ではヨーロッパや中国を中心として、各地でジオパークが運営されている。ジオパークは科学的に重要な地質遺産を資源とした自然公園であるが、その地域の文化、教育、観光などの振興をとおして地域社会の活性化を目指している点で、いわゆる自然公園とは異なっている。日本においては 2008 年 12 月、洞爺湖有珠山・糸魚川・島原半島の 3 地域が、世界ジオパークネットワークに対し登録の申請を行うなど、ジオパークの動きは活発になりつつある。

茨城大学の地質学を専攻する学生からなる地質情報活用プロジェクトは、茨城県内の 6 地域において地質学的見所とその見所を結ぶルートを設定し、各見所の特徴や地域の成り立ちを、極力専門用語の仕様を控え、イラストを多用することで一般にわかりやすくまとめた「地質観光マップ」を作成した。さらに、この地質観光マップを活用し、プロジェクトメンバーが現地で一般を対象として、案内・解説を行う「ジオツアー」を実施した。

ツアーは、水戸市千波湖で実施した。千波湖は、水戸市街に位置する湖で、都市公園として整備されている。隣接する偕楽園と合わせると、都市公園としては米国ニューヨーク市のセントラルパークに次いで世界第 2 位の面積を持つ。当日(2008 年 11 月 30 日)は最寄り駅である水戸駅に集合し、そこから千波湖を周り、水戸駅に戻るルートを全工程徒歩にて行った。ジオツアーの案内・解説は、プロジェクトメンバーである茨城大学の学生が行った。参加者は新聞・チラシ・プロジェクト HP で一般の方々を募った。地質学的ポイントとしては、1) 貝塚跡、2) 対岸の台地、3) 台地の断面露頭を案内し、約 2 万年前からの海水面変動とそれに伴う河川の侵食・運搬により周辺の台地と千波湖の原形ができたことや、それが江戸時代からの干拓により水田化・市街地化してきたことがわかるよう解説した。各ポイントの間には、水戸の歴史・文化や千波湖の水質問題なども解説した。

得られた成果としては以下の 2 つが挙げられる。1) 地質観光マップの作成のみでは得にくい一般市民からの声と、2) 本プロジェクトと地域住民との繋がり、である。1) では、特に参加者からのアンケートにより意見を積み、これにより、本ツアーのようなイベントに始めて参加したという人が参加者全体の約 4 割いるなか、全体の 9 割がまた参加したいと回答するなど、ジオツーリズムに期待を示す意見が大勢を占めた。また 2) では、地域の成り立ちに触れ、地質の面白さに気づくことで、ジオパーク設立において重要な、地域住民のジオパークへの積極的な関わりに向けた一歩になることが期待される。

なお、本プロジェクトの実施に当たり、茨城大学社会連携事業会から資金援助を頂いた。